

学業不振に関する研究

—— 性格検査，親子関係，精神作業検査からの考察 ——

柏崎市立第三中学校教諭 本 間 吉 郎

はじめに

児童・生徒にとっては、真の学力を培う学業をおさめることは社会から期待されている重要な課題であるとともに、その成否は彼らの現実の生活適応に重大な影響をもたらすものである。しかし個々の生徒の学業に対する関心・意欲・学業成績の実態について調べてみると必ずしも高い水準にあるというわけではなく、むしろ、このままの状態であるならば、危険だと思われる生徒も数多いのである。最近特に中学校においては、実力の養成ということから補習指導が強化され、実力テストや模擬テストなどを無計画に実施し、その得点を問題にし評価している。その結果学業不振で苦しむ生徒は、劣等感を深刻にしているので学業の振わない生徒がますます取り残される心配がある。ややもすると今日の進歩した教育の組織の中では個人の心の中の問題や、個人の主観的な心の内面にふれるようなきめのこまかい教育がうまくおこなわれにくいのではないだろうか。学業不振の児童・生徒は、単に学業不振という一つの固定した状態にとどまっているだけでなく、彼らの心の中では、徐々にゆがんだ感情が高まっていくであろう。このような意味から学業不振に関する研究をとりあげて、あすからの学習指導ならびに生徒指導の上に役立てていきたい。

I 研究の構想

1 主題設定の理由

児童・生徒の学業は、知能テストの結果が高くても、本人の心身の状態や環境条件により学習に力を集中しないか、集中できない場合には、その成績は上がらないと考える。

知能に応じた学力を発揮しない児童・生徒は、ややもすると社会的適応や行動に障害が起り、情緒の安定を失い学習嫌悪、学習態度不良に陥ってしまうのである。学業不振の問題は、児童・生徒の問題行動同様に環境的な面、情緒的な面の研究がなされなければならない。

2 研究の目的と対象

知能と学力との関係をしらべ、知能に比べて成績の振わないものと、知能に比べて比較的学力の高いものの2群に分け、この2群

について学力を左右すると思われる要因について明らかにし、学業不振生徒に対する指導の手がかりを得たい。

3 調査研究の方法

- (1) 調査対象 柏崎市立第三中学校・1年（1クラス）46人
- (2) 実態調査 ・家庭環境調査（家族数，同胞順位，職業）
・個人調査（行動，性格，学習，身体，教科他）
- (3) 実施する諸検査（知能検査，学力検査，性格検査，親子関係診断テスト，クレペリン精神作業検査）
- (4) 知能と学力との関係についてしらべる。
- (5) 上位群，下位群の選定を行なう。
- (6) 事例研究
 - 上位群と下位群の性格特徴をしらべ、学業不振の原因と思われる要因についてあきらかにする。
 - 上位群と下位群の親子関係をあきらかにし、学業成績との関連についてしらべる。
 - クレペリン精神作業検査により、下位群生徒の精神活動の様相をあきらかにし、個々の生徒の精神的特徴を理解する。

II 知能検査と学力検査の実施結果

1 学業不振について

まず学業不振の意味を明確にする必要がある。学業不振ということばは、すでにわかりきったことばのようであるが、よく考えると実はそれほど明確なものではない。通常学業不振ということばは、次の三つのような意味で用いられている。①一定の教育目標に到達していない児童・生徒を学業不振と考える立場、②同学年の平均学力水準に到達していない児童・生徒を学業不振と考える立場、③個人のもっている知能水準に比べて、学力水準が低くなっている児童・生徒を学業不振と考える立場。このように学業不振を三つの意味から考えられるのである。①②③の意味を検討してみるときわめてあいまいで、多くの問題点があるのである。学業不振のためにいろいろな適応障害が発生し、情緒の安定を欠き、深い苦しみを味わっている多くの児童・生徒がいることは疑う余地のないことである。

2 学業成績の要因について

学業成績は知能のみによって決定されるのではない。学習者の努力、熱心さなどの条件や環境条件が大きな要因である。学業成績を左右するものの中には家庭、特に親子関係が大きな影響を与えることを考えなければならない。

3 知能検査と学力検査の関係

知能は、田中B式知能検査実施の結果であり、学力は、田研式標準検査の数学と国語の2教科の平均偏差値である。知能と学力の相関係数をしらべたら、0.813で相関がかなり高いことがわかった。

4 上位群、下位群の選定

上位群、下位群を選定するために学力偏差値から知能偏差値を引いたその差をdとする。dの分散は正規分布をしていないので、四分偏差(Q)のQ₁、Q₃を求め、その結果Q₁は……Q₁>-5であり、Q₃は……+6>Q₃であることがわかった。ここでは一応、d<-7を下位群として、d>+7を上位群とした。以下上位群というのは学力偏差値と知能偏差値との差が+7以上であり、下位群というのは-7以下である。この結果上位群は男子3名女子5名の9名となり、下位群は男子6名女子2名の8名を選定した。

Ⅲ 矢田部ギルフォード性格検査の実施結果

矢田部ギルフォード性格診断テストを実施し、学業不振生徒の性格特徴をあきらかにしようとするものである。まずその性格とはどのようなものであるかを理解することが必要である。一般に性格は個人が当面するすべての状況に対するその個人の反応の総和であるといわれている。また性格は個人の基本的傾向性であるともいわれる。したがって性格は、先天的に規定された恒常不変的なものでなく、次第に形成され発展するものであると考えられている。すなわち、生後において社会との相互交渉によって形成される。いわば生活史的過程の産物であると考えられている。個人の性格的特徴は、いろいろな集団内における彼の社会的地位とか役割、あるいはいろいろな集団の彼に対する要求と期待とが、その個人の性格の特質を形成していることになる。わたしたちが児童・生徒の性格特性をしらべて考察および指導を行なうにあたって重要なことは、児童・生徒がおかれている社会的環境との関連をあきらかにしていくことが重要な課題である。

1 性格類型について

矢田部ギルフォード性格検査では、その結果の傾向を次の5類型にわけてある。

- 平凡型(A型) 全く平均的な状態を示す人で、万事につけて平均的・調和的で適応的なタイプ。
- 安定積極型(B型) もっとも理想的な人格の持主で、情緒的に安定し社会的適応もよく、活動的で対人関係もうまくいくタイプ。
- 安定消極無気力型(C型) おとなしく消極的で安定した人格であるが活動性がなく内向的なタイプ。
- 不安定消極不適応型(D型) 情緒不安定、社会的不適応、内向的が特徴で、この型の典型的な人はノイローゼまたはノイローゼ気味の強い人である。
- 不安定積極非行型(E型) 情緒不安定、社会的不適応、活動的外向的なのが特徴で、人格の不均衡が外にあらわれる型、非行行動に出やすいタイプ。

第1表 性格類型の群別比較

類型 群	A 平凡型	B 安定積極型	C 安定消極無気力型	D 不適応型 不安定型	E 非行型 不安定積極型	計
上位群	3	2	1	2	0	8
下位群	4	5	0	0	0	9
計	7	7	1	2	0	17

上位群はA、B型に集中しており、下位群はC、D型にもみられる。

2 性格特徴について

第2表 性格特徴の群別比較{標準点、()内の数字は平均}

尺度 群	D 抑うつ性小	C 気分の変化小	I 劣等感	N 神経質でない	O 客観的	Co 協調的	Ag 攻撃的でない	G 非活動的	R のんきでない	T 思考的内向	A 服従的	S 社会的内向
下位群	24 (3.0)	22 (2.8)	23 (2.9)	24 (3.0)	22 (2.8)	24 (3.0)	25 (3.0)	22 (2.8)	25 (3.3)	19 (2.4)	22 (2.9)	21 (2.6)
上位群	21 (2.3)	26 (2.9)	21 (2.3)	26 (2.9)	26 (2.9)	26 (2.9)	29 (3.3)	28 (3.1)	28 (3.1)	30 (3.3)	19 (2.1)	23 (2.6)

12の性格特性について、下位群、上位群を比較し、両群の性格特徴の傾向をあきらかにする。両群の差の比較の少ない性格特徴は、C(気分の変化) N(神経質でない) O(客観的) S(社会的内向) などである。比較差のみみられる特徴は、T(思考的内向) D(抑うつ性) A(服従的) I(劣等感) G(活動的)な

のである。上記のことから下位群の性格特徴の傾向として上位群、に比べて物事にこだわり、劣等感をもち行動に自信がなく消極的で追従的な傾向がみられる。上位群はそれとは反対で、物事にこだわらず活動的で、主体性もあり思考的外向的である。しかしその反面上位群は下位群に比べて自我意識が強くやや利己的な傾向がみられる。

3 性格特徴の領域について

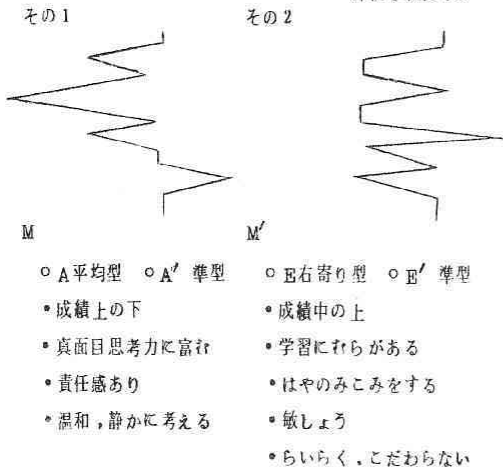
第3表 性格特徴領域の群別比較 { 粗点 () のうちは百分比 }

領域 群	情緒的安定	社会的適応	活動的	非衝動的	内省的	主導的
下位群	93 (11.6)	71 (8.9)	71 (6.0)	48 (6.8)	45 (5.6)	43 (5.3)
上位群	94 (10.4)	81 (9.0)	83 (9.2)	56 (6.2)	58 (6.4)	42 (2.6)

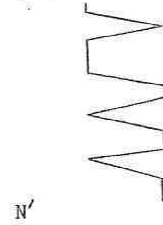
各事例の性格特徴を領域ごとにまとめて両群の性格特徴についてあきらかにする。各領域のうち比較的差の大きい領域は、情緒的安定と内省的、主導的などである。上位群は下位群に比べて一般に情緒が安定し、しかも内省的でもあり活動的で主導性も大である。下位群はその反対の傾向がみられ、情緒的にも安定を欠き、引込み思考で依存性が高い。

4 下位群生徒の個人別プロフィール

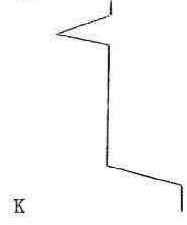
第1図 個人別プロフィール 注・印は教師の観察によって評価されたもの



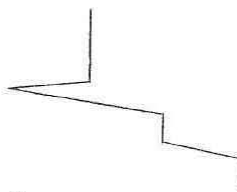
その3



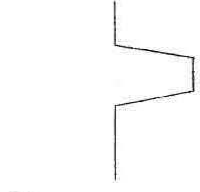
その4



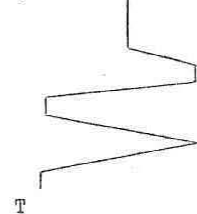
その5



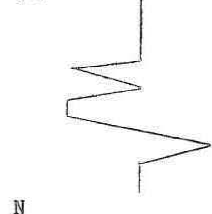
その6



その7



その8



5 考察と結論

上位群、下位群の生徒の性格特徴については、第1、2、3表のとおりであり、両群の特徴を比較することによって、その性格の相

違をみようとしたものである。

両群の性格特徴のうちで比較的差があると考えられた特徴は、T（思考的活動性）、D（抑うつ性）、A（支配的）、I（劣等感）G（一般的活動性）等である。下位群は上位群に比べ、物事に対して消極的で自信がなく、情緒もやや不安定で依存性が強く意欲が乏しいということがいえる。性格が学習意欲を規定するのか、学習適応が性格を規定するものなのかどうか簡単にかたづけられないものである。

今日の教育は児童・生徒の学力の向上を期待するあまり、児童・生徒ひとりひとりの性格や能力、動機等に対する教育的配慮が乏しく、いたずらに競争心をあおるなど外的動機による学習指導が多くなってきている。生徒みずから学習しようとする自発的な学習指導法の配慮が必要なのである。そのためにはわれわれ教師は、児童・生徒の性格特徴や興味、欲求等をじゅうぶん考慮して指導にあたらなければならない。ことに性格的に問題のある児童・生徒については科学的方法によって得た資料をもとに個別的な指導等が是非必要となってくるのである。

Ⅳ 親子関係診断検査の実施

人間関係のなかで、子どもの性格形成にもっとも大きい影響力をもつものは、親子関係であると一般にいわれてきている。子どもを正しく理解するためには単にその子どもの性格を究明し、能力を測定するだけではふじゅうぶんなのである。自分の受け持つ児童・生徒がどのような親子関係のなかで生活し、現在どのような精神的交流がなされているか、そしてそれが児童・生徒の学業成績とどのように関係してきているかについて解明することが重要となってくるのである。

親子関係の診断は、児童・生徒の性格や行動がいかなる要因に由来するかを明らかにする上に大きな役割を果たすのである。また一面親子関係を学業成績との関連において診断し、それを教育的に活用することは児童・生徒の性格の改善および学業成績の向上にも大いに役立つものである。

1 親子関係診断検査の実施結果

下位群、上位群の親と子との間にどのような関係があるかをあらかじめするため、田研式親子関係診断テストを実施し、その結果を第4、5、6、7表に示した。

(1) 父子関係について

第4表 父子関係における父親の態度

{ 実数, () のうちは百分比 }

関係	類型	消拒 極否	消拒 極否	厳 格	期 待	干 渉	不 安	溺 愛	盲 従	矛 盾	不 一 致
危 険	上位群	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0
				(1.0)				(1.0)			
下 位 群	下位群	2	1	1	0	1	0	0	0	1	3
		(2.5)	(1.25)	(1.25)		(1.25)				(1.25)	(3.75)
準 危 険	上位群	1	0	0	0	0	0	4	0	0	1
		(1.0)						(4.0)			(1.0)
下 位 群	下位群	0	1	2	1	2	1	1	0	0	3
			(1.25)	(2.5)	(1.25)	(2.5)	(1.25)	(1.25)			(3.75)
普 通	上位群	7	8	7	8	8	8	4	8	8	7
		(7.8)	(8.9)	(7.8)	(8.9)	(8.9)	(8.9)	(4.0)	(8.9)	(8.9)	(7.8)
下 位 群	下位群	5	5	4	6	3	7	6	7	6	1
		(6.25)	(6.25)	(5.0)	(7.5)	(3.75)	(8.75)	(7.5)	(8.75)	(7.5)	(1.25)

下位群の父子関係は、父親の拒否的、不一致、厳格、干渉の態度が父子間に好ましくない関係となっている。

下位群は上位群に比べて危険な父子関係にあるものが多い。とくに父親の拒否、厳格、干渉、不一致の態度が危険である。上位群においては溺愛の危険な父子関係が多い。

(2) 母子関係について

第5表 母子関係における母親の態度

{ 実数, () のうちは百分比 }

関係	類型	消拒 極否	消拒 極否	厳 格	期 待	干 渉	不 安	溺 愛	盲 従	矛 盾	不 一 致
危 険	上位群	1	0	0	1	2	0	1	0	1	2
		(1.0)			(1.0)	(2.0)		(1.0)		(1.0)	(2.0)
下 位 群	下位群	1	0	1	0	0	0	0	0	0	2
		(1.25)		(1.25)							(2.8)
準 危 険	上位群	1	1	2	0	1	3	2	0	1	0
		(1.0)	(1.0)	(2.0)		(1.0)	(3.0)	(2.0)		(1.0)	
下 位 群	下位群	2	2	4	4	3	2	1	0	0	1
		(2.5)	(2.5)	(5.0)	(5.0)	(3.75)	(2.5)	(1.25)			(1.25)
普 通	上位群	7	8	7	8	6	6	5	9	7	7
		(7.8)	(8.9)	(7.8)	(8.9)	(6.0)	(6.0)	(5.0)	(10.0)	(7.8)	(7.8)
下 位 群	下位群	4	5	2	3	4	5	6	7	7	3
		(5.0)	(6.25)	(2.5)	(3.75)	(5.0)	(6.25)	(7.5)	(8.75)	(8.75)	(3.75)

(下位群母欠損1人)

下位群の母子関係は、母親の厳格、期待、干渉、不一致、消極的拒否の態度が母子間に好ましくない関係となっている。

母子関係における危険な関係は、父親に比べてやや少なく類型の広がりも少ない。ただし準危険の類型については下位群の方は、上

位群より広がりがあることがわかる。厳格（50：22），期待（50：0），干涉（38：11），不一致（25：0），下位群の母親の態度は上位群の母親の態度に比べてかなり危険度の大きいことを示している。

(3) 親子関係における両親の態度

第6表 親子関係における両親の態度 (実数)

群	類型	消極的拒否	積極的拒否	厳格	期待	干涉	不安	溺愛	盲従	矛盾	不一致
上位群	危険	1	0	1	1	2	0	2	0	1	2
	準危険	2	1	2	0	1	3	6	0	1	1
下位群	危険	3	1	2	0	1	0	0	0	1	5
	準危険	2	3	6	5	5	3	2	0	0	5

両親の態度を第6表にまとめ、上位群・下位群を比較するといっそう下位群の親子関係における危険度のあいがきらかになった。

○上位群の両親の態度……上位群の両親の態度にみられる傾向としては、子どもを溺愛する両親の態度が目立つことである。

○下位群の両親の態度……下位群では両親の不一致がもっとも多く、厳格，干涉，拒否の態度の多いことがあきらかになった。

上記の結果によってあきらかにされたことは、下位群の性格特徴に大きな影響を与えられ考えられる親の態度は、両親の態度の不一致（子どもに情緒的不安，不満をいだかせる），厳格（頑固，命令，統制，干涉），拒否的態度（愛情の欠如，援助の拒否，無視），干涉的態度（支配的，保護的）等である。すなわち，下位群の両親の態度で共通した特徴は，両親の意見の一致がみられず，必要以上に親の考えを押しつけ期待しすぎる態度がみられる。このような親の態度はややもすると子どもを傷つけ，学習への興味や意欲を阻害する大きな要因となり，子どもの情緒を不安定にする原因ともなるのである。

(4) 調査対象（母集団）の親子関係における両親の態度

第7表 母集団親子関係診断検査結果

父 親 の 子 に 対 す る 態 度	類型	(数字は百分比)		危険 準危険 正 常
		消極的拒否	積極的拒否	
父 親 の 子 に 対 す る 態 度	消極的拒否	9	20	
	積極的拒否	7	16	
	厳格	14	16	
	期待	7	9	
	干涉	7	15	
	不安	5	9	
	溺愛	9	13	
	盲従	2		
父 親 の 子 に 対 す る 態 度	矛盾	16	11	
	不一致	11	25	

母 親 の 子 に 対 す る 態 度	消極的拒否	11	27
	積極的拒否	9	22
	厳格	9	31
	期待	11	31
	干涉	9	22
	不安	7	20
	溺愛	7	9
	盲従	2	
	矛盾	20	14
	不一致	13	22

○親子関係における父親と母親の態度はそれぞれこととなっていることである。やはり両親の家族内における立場の相違，性格の相違からきているものと思われる。

○母親の態度で危険な事例は父親に比べて全般に多く，なかでも子どもに対する期待がもっとも多い。

○親子間の関係は，しばしば一般のそれとはことなるものがあるので，調査結果からだけでは理解されない面のあることに注意したい。

2 結果と考察

上位群，下位群の生徒の親子関係診断テストの結果から好ましくない親の態度がいくつかあきらかになった。特に注目されるものとして，両親の態度の不一致と拒否的態度および厳格な親の態度である。これはいわゆる両親が，子どもの心理や能力に対する配慮がなく，一方的に期待を寄せるという野心投影型の親の態度である。問題のある親子関係が子どもの情緒を不安にさせ社会性をゆがめることになり，学業成績にもなんらかの影響を与えるものと推定される。子どもは親や教師が勉強だけを強制し，いたずらに親の期待を子どもに押しつけようとすればするほどその期待とは反対の方向に進みそれがいつそおとなをあせらせるだけでよい結果は得られないのである。学業不振の問題は，単に学業だけを切りはなして取り扱うべきものでなく，やはり親子関係や生徒の性格特徴等についての診断と治療が必要なのである。さらに学業不振に付随してくる他の問題も考慮しながら，あせらず一つ一つの問題に取り組んでいかなければならない。

V クレペリン精神作業検査の実施結果

この検査は，個人の精神のさまざまな働きをその現象型においてとらえ，そのうちにかくされている本質的なものを握し，その特質を理解しようとするものである。ここでは，その特質は，生徒個

人の全人格像との有機的関連の上において理解しようとするものである。

1 下位群生徒の個人的プロフィール

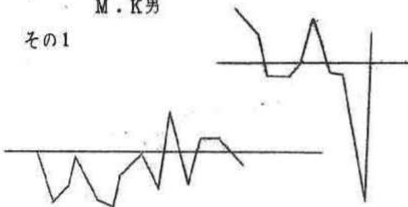
クレペリン精神作業検査結果のプロフィールは、第2図のとおりであり、検査結果の整理に用いた記号の説明を次に記す。

m 平均作業量, r 最大差, π 初頭努力,
S 動揺率, v V字型落込, f 平均誤びゆう量,
t 休憩効果率

第2図 個人別プロフィール

M・K男

その1



(準々定型)

m	37	49
r	7	14
π	+	
s		
v		+
i		
t	L32	
判定	a''	

U (定型), W (波状型)

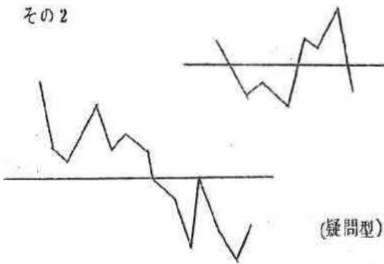
(SH) 回帰性性格, ヒステリー性性格

性格検査結果 (安定平凡型)

初頭意志緊張の現われがあり意志的努力がみられる。ただし作業量に動揺が目立ち、一つの大きな落込みがみられる。

M'・K男

その2



(疑問型)

m	25	25
r	13	7
π		
s		
v		
f		0.1
t	1.0	+++
判定	CF	

L (下降型), U (定型)

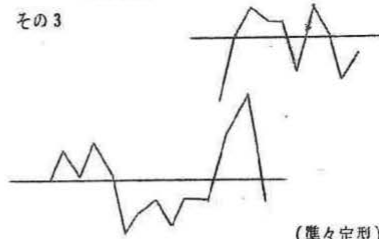
(SH) 分裂性性格, ヒステリー性性格

性格検査結果 (不安定積極型)

休憩後の作業量の上昇 (休憩効果) が少ない。少しは興奮現象は起るが、慣れの因子はあまり働かない。性格上の欠陥としてあきつ、ぼく気まぐれの徴候がみられ情緒的にも安定を欠いている。

N・H男

その3



(準々定型)

m	49	49
r	11	6
π	+	+
s		
v		
f		
t	L19	
判定	a''	

U (定型), M (中高校型)

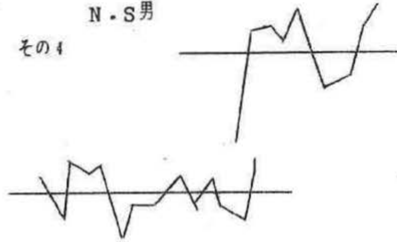
(SH) 分裂性性格, ヒステリー性性格

性格検査結果 (平凡普通型)

仕事へのとっつきが悪い。初頭意志緊張による作業量の実出がみられない。慣れの因子もあまり働かない。しかも緊張の持続ができない。

N・S男

その4



(異常型)

m	19	18
r	5	9
π		++
s		+
v		
f		
t	0.95	+++
判定	CP	

H (水平型), M (中高校型)

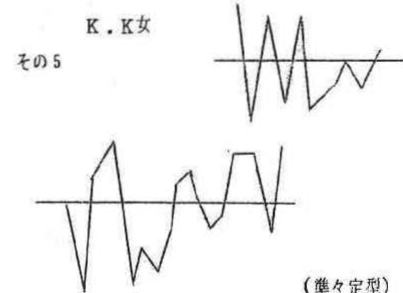
(SH) 分裂性性格, ヒステリー性性格

性格検査結果 (不安定積極型)

初頭意志緊張による作業量の実出が全く認められない。根気、努力にかけ、緊張がほとんどみられなく休憩効果が全くない。

K・K女

その5



(準々定型)

m	39	44
r	10	8
π	+	
s		
v		
f	+	
t	L13	+
判定	d''	

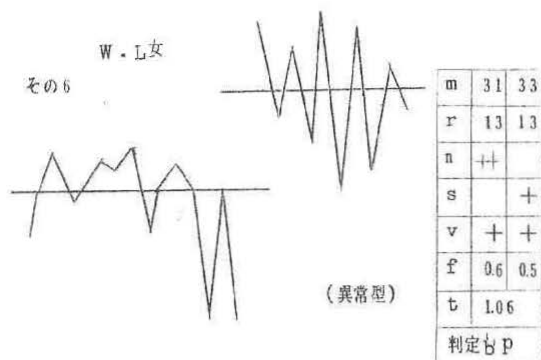
W (波状型)

(SH) 分裂性性格, ヒステリー性性格

性格検査結果 (平凡普通型)

仕事にむらがあり、過度に緊張すると思うと突然激しい弛緩が起る

る。不安、焦燥の現われが激しく気持の動揺がみられる。



M (中高校) , W (波状型)

(ZB) 回帰性性格, てんかん性性格

作業中意志の弛緩または解消が激しく, 下降上昇が極端である。一種の異常緊張と考えられる。意志障害によるものか, または意志抑圧と呼ばれるなんらかの精神機能障害があるか, さもなければ性格的特徴によるものと考えられる。(なお, スペースの都合上2名のものは省略した)。

2 結果と考察

個々の曲線は, 被験者の顔と同じにそれぞれ一つとして全く同じものは見られない。しかし全体を貫ぬき流れている傾向を見ると, 幾つかの類型に分類することができた。性格類型によって分類する

と, この研究下位群では回帰性性格に比べて分裂性性格の方が多く, 2:6であった。分裂性性格者の一般的特徴として, 新しい仕事や環境に慣れにくく, 仕事をしようとしても意志の発動がなかなか起こらず, 順応がおそいということである。この検査が児童・生徒の学業不振に関する問題の究明に役立つものであることを知った。

むすび

教育の目的は, 児童・生徒の個性および能力を伸ばすことでありその有する能力の可能性を最大限に発揮させる機会を与えてやることである。すなわち, 教育は押しつけではなく, 手助けであるといわれ, 自主的な学習が学習指導法の研究や生活指導に重点的に取り上げられているのである。しかしその反面, 生徒数の激増と経済社会の高度化に伴って学校教育までもオートメ化し, テストの点数などによってある格付けがなされることがないわけではない。義務教育の後期をになう中学校こそ生徒ひとりひとりの個性や能力を考慮し, 個々の生徒の学習態度およびパーソナリティの層にまで研究と指導の手を広げ伸ばしていくべきである。学業が振わないで苦しんでいる生徒の数多くいる現場において, 常に教師は, 学力の面に欠陥があるのか, その原因が生徒の環境的要因からか, あるいは彼らの性格形成の面に問題があるのかなどに対する研究と配慮が必要であることを痛感するのである。